

プロジェクトコーナー



給食開始で出席率アップ!

—ブラクール教育プロジェクトの3年目—
(ひろしま・祈りの石国際教育交流財団助成)

大学に進学する機会がほとんどないブラクールの子どもたちが、小学校・ハイスクール卒業後に自活できるようにと始めた先住民族子弟のための包括的教育プロジェクトが3年目を迎えました。

職業教育は今年度も学年ごとに、縫製・食品加工・農業技術などの基礎技術を習得します。すでに追加教材の購入が進んでいます。

就学前教育の義務化により、昨年開設したブラクール幼稚園。2年目に入ったこの6月から給食を始めました。都市部との学力格差を是正する上で就学前教育は重要で、4-6歳児合計30人を1人で担当するシェレロ先生の指導にも熱が入ります。



黒板に書かれたFLAG(旗)の文字とフィリピン国旗を書き写す幼稚園児(文字盤は事業で購入・配布)

給食は1人1食7ペソ(約15円)週3回の予定を毎日に変更しました。そのため1食分の予算は半減し、子どもたちは野菜を持参します。そして給食により昨年より出席率がアップしています。

また、新規に導入したのは民族楽器の習得です。竹笛、口琴、チボリギターは、COWHED から購入しました。ドラは在庫がなく、譲ってくれるところを探しています。

学力や技術だけでなく、民族文化への誇りも自信と自立につながると考えた民族楽器学習の導入です。10月のブラクール・フェスタでは、生徒たちによる民族楽器演奏が見られそうです。(山崎)



山のとっぺんから木を植えよう

—2年目のクハン村アグロフォレストリー事業—
(イオン環境財団助成)

「コルディレラ地方では山のとっぺんに木が残っていて棚田の水源を涵養している。ここも、まずとっぺんに木を植えることだ」。6月訪問に同行された「アボン・小さい家」の映画監督今泉さんは、クハン村でもビデオカメラを手に精力的に歩き回り、ルソン島北部の事例を住民に話して「とっぺん植林」を勧めました。

私も入会地の水源涵養林育成作業が余り進んでいないのに気づき、担当の PFP サムソンさんに尋ねました。住民は自分の畑で等高線状にバナナや果樹苗を植え付けるのに忙しく、入会地の作業は後回しになっているとのこと。

今泉監督が心配するように、クハン村周辺の山のとっぺんはコゴン草かコーン畑になり樹木はほとんどありません。この各自の土地に「とっぺん植林」を進めれば水源涵養林になります。共同作業の遅れを気にしていたサムソンさんも、各自の畑の頂上付近にナラ、ナボル等の在来種苗木を植えることにしました。住民も自分の土地での植林に意欲的でした。

この日、車で運んできたスコップを今年度の対象者15世帯に配りました。新しい農具を手にし、みな嬉しそうです。

2年間で30世帯30ヘクタールにアグロフォレストリーが広がります。隣接地域への刺激になればと願っています。(山崎)



組合員ひとりひとりにスコップを配布する
クハン自然農業組合長ファラドさん(右から2人目)